



使徒の働き 1:-28:

2017.8.1

使徒行伝 イスラエル民と異邦人を照らす光

十字架と復活

- ・老人シメオン 「救い(イエス)を見た。異邦人を照らす啓示の光。御民イスラエルの栄光。」^{ルカ 2:}
- ・アグリッパに 「ダマスコで見え光、民と異邦人の目を開く。暗闇から光に。神の国!」^{使徒 26:}
- ・預言者とモーセ = キリストの十字架と復活による。民と異邦人に光を宣教。^{使徒 26:}
- ・ピシディアのアンテオケで 「約束の救い主が復活した... 異邦人の光。地の果てまで救いよ。」^{使徒 13:}
- ・エマオ 「キリストは、苦しみの道に栄光に入る - モーセの律法と預言。聖書全体」
- 目を開く ^{ルカ 24:}
- ・復活の主 「モーセの律法と預言。詩篇が成就。」
- 目を開く ^{ルカ 24:}
- ・昇天 「キリストの苦しみの道に栄光に入る。悔い改めよ。イスラエルからあらゆる国の人々に」
^{ルカ 24:}
- ・昇天 「イスラエル。25年。サマリア。地の果てまで。わたしの証人とする」
^(使徒 13:46)
- ・バプテスマのヨハネ 「まことの光が来た。ヨハネは光について証した。「神の子、」
- ・ヨハネのバプテスマ 「暗黒と死の陰に可憐な人々を照らす。」
- ・イザヤ9: 「異邦人がガラヤは光を見た。暗闇と死の陰に光が上り。マタイ:」
光が来る(さばきの座に)のど「悔い改めよ。神の国が来た。」
(新しい神国。キリストの57年。キリスト人)
^{ヨハネ 2:19}

使徒行伝の分析をしています。使徒行伝の分析をする時にいろいろな見方がありますが、一つのテーマとして流れているものは、イスラエルの民と異邦人を照らす光であるということです。十字架と復活によってその光が照らされた、明らかにされたということが、この使徒行伝の中、ルカ福音書の中で言われています。この異邦人を照らす啓示の光と言っているところです。

シメオンが「救いを見るまでは死にません」と言って救いを見ました。救いを見ましたというのが、イエスを見たということです。救い主を見たということです。救いというのは、じゃあ何なのと言うと、異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光。これも光です。異邦人に光を当て、民に栄光を見せるということが、この救いというものの一つの定義の仕方になっているのだと思います。光はいろいろな形で、その後に順番には書いていませんが、順不同で出てきます。

アグリッパにパウロが弁明する時にダマスコで光を見ました。民と異邦人の目を開くために来た者です。暗闇から光、神の国が来るのだということを話している使徒行伝26章。預言者とモーセに書いてあったように、キリストの十字架と復活によって民と異邦人に光を宣べ伝える。これが私の責任ですということをパウロが言います。

ピシディアのアンテオケで証言するときに、約束の救い主が復活しました。異邦人の光、地の果てまで救いを述べ伝えられる為だということを、これもパウロが言います。

エマオの人達にエマオに行く道で、弟子たちに、「キリストは苦しみの後に必ず栄光に入るはずじゃなかったのですか」というその光について、「モーセの律法と預言者と聖書全体で教えてくださったので、私たちの目が開いたじゃないですか」というように言います。

復活の主が復活した時に「モーセの律法と預言者と詩篇は必ず成就します」というように言うのですが、キリストの苦しみの後によみがえって罪の許しを得させるための悔い改めがエルサレムからあらゆる国の人々に知らされる。これは光の話をしているということです。それで昇天してエルサレム、ユダヤ、サマリア、地の果てまで私の復活の証人になります。バプテスマのヨハネは「まことの光が来た」と言って、ヨハネは光について証しします。私は光ではない、イエス様が光ですと言って、光について証言しますね。

ヨハネの父のゼカリヤが生まれる時にも、暗黒と死の陰に座るものを照らすという。これはイザヤ9章の預言ですね。そのことを引用して異邦人のガリラヤは光を見る。暗闇、死の陰に光が上ると。光が来るので、さばきの座につくので、悔い改めなさいということが言われている。異邦人とイスラエル人の両方を照らす光であるということが、パウロの光についての証の中心です。その光について証ししているということも、使徒行伝を全体見る時に大切な一つのテーマだと思われます。